

アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開 (7)

——1940年代における手指使用状況——

草 薙 進 郎

本稿の目的は、トータル・コミュニケーションの展開の一要因として、1940年代における聾学校での手指使用の教育状況を明らかにすることにある。その結果、次のことが明らかにされた。(1) 当時、大多数の寄宿制聾学校は、何らかの形で手指言語を使用していた。(2) その状況は、学校毎に異なり、手指クラス内では指文字は使用されても、手話は許されなかった。(3) 手指クラスは学習遅滞児のための特別クラスとは異なり、手指使用と知能劣弱性を結びつけるべきではない。(4) イリノイ聾学校では、個人差を考慮して手指部を設けている。同校のコミュニケーション法の比較研究から、指文字の有効性が示唆された。(5) ミシガン聾学校では口話を基礎に指文字を使用しており、手話は上学年において社会生活に備えて、希望者に教えられる。(6) ロチェスター聾学校では、教科内容が重要となってくるおおよそ4学年より、指文字が導入されている。

キーワード： トータル・コミュニケーション 手指法 手指クラス 指文字
手話

序 言

アメリカ聾教育において、1960年代末に至って「トータル・コミュニケーション」が台頭し、1970年代を通じて、聾学校を中心に急速、かつ広範囲に、普及、展開していった。筆者は、先に、トータル・コミュニケーションの成立の重要な要因として、1950年代および1960年代における、手指使用状況とその有効性に関する主張を検討、考察した。⁹⁻¹²⁾

当面の課題は、さらに年代を遡及して、1940年代における手指使用の教育状況と手指の有効性に関する主張を取り上げて、検討、考察することにある。当面、1940年代を取り上げる意義として次の2点が挙げられる。

第1に、1950年代の検討結果からみて、おそらく1940年代にも、手指使用の有効性に関する主張と、その教育実態が存在していたことが予測されることである。第2に、20世紀の最初の40年間、すなわち1930年代までは、口話法の隆盛期だと言われており、その意味で1940年代には、何らかの手指導入への動向がみられるのではないかと考えられる点にある。さらに加えれば、1940年代は聴能学 (audiology) が台頭し、新しい補聴器が開発され、まさに口話法は、「聴覚・口話法」とい

う新しい装いのもとに強化され、発展を開始した時期である。こうした時期に、手指使用の教育状況と手指使用の有効性に関する主張が、どのような形で存在していたのかを明らかにすることは、興味ある問題である。

さて、本稿は、こうした当面の課題のうち、まず1940年代の手指使用の教育状況について、検討、考察することを目的とする。

1 寄宿制聾学校に関する調査

通学制聾学校発展の一要因は口話法を促進する上で、それが適切な教育の場と考えられた点にある。これに対し、寄宿制聾学校の多くは、歴史的に手指の併用を容認してきた (併用システムの採用)。この寄宿制聾学校の手指使用状況について、1940年代に二つの調査がみられる。

Caswell, R. R. によれば、ロチェスター聾学校長の Golloway, L. E. は、“American Era” (1945年11月号、ロチェスター校誌) に、全米の64の寄宿制聾学校の調査結果を、次のように報告している。³⁾

64校のうち、56校 (87.5%) は、何らかの形で手指言語 (manual language) を使用しており、手指言語の使用を禁止しようと試みているのは、8校 (12.5%) にすぎなかった。ロチェスター校

Table 1 初等部、中等部、高等部における教育方法

部	口話	手指	口話と聴覚	併用	合計
初等	32	7	1	9	49
中等	25	4	2	18	49
高等	13	1		35	49

(注) 大多数の学校では初等部に第4～第6学年までが入っている

は、スピーチ指導と指文字を併用する、いわゆる「ロチェスター法」によって優れた成果を達成している、一つの実例である。

次に、Brown, R. C. (1945) は、「初等学年における教育プログラム」について、調査研究を実施しているが、質問項目の一つに、教育方法についての問題が含まれている。すなわち、「初等、中等、高等の各部で、いかなる教育方法が使用されているか」ということが質問された。対象は、公立寄宿制聾学校49校である。結果は、表1の如くであった。²⁾

この表からわかるように、口話法は初等部で多く使用されている(65.3%)が、中学部、高等部ではその使用は減少している。逆に、口話と手指の併用法は、初等部では少ない(18.4%)が、中等部、高等部では増加している(71.4%)。手指法(手話、指文字)と聴覚法の使用は、共に高等部では皆無か僅少である。

このBrownの調査は、全体的傾向を知るには参考となるが、数字が学校数で表わされているため、同じ部内でも、イリノイ聾学校(後述)のように、口話法と併用法のクラスが共存することが予想されるので、この点疑問が残る。また「併用法」の実際が具体的にどんなものであったかは、この調査からは明らかでない。

とはいえ、以上の二つの調査から、寄宿制聾学校(とくに公立学校)の場合は、手指言語の使用が高率であることがわかる。そして、その使用は、上学年になるにつれて増加していることが明らかである。

2 寄宿制聾学校における併用方式の状況

寄宿制聾学校は、一般に「併用」学校として知られているが、その「併用」の意味する内容は、学校によって若干異なっている。Brill, R. G.

(1948)は、この点に関して次のように指摘している。¹⁾

「寄宿制聾学校は、聾児の大多数を教育しているが、その殆んどは『併用』学校として知られている。このことばの実際の定義は、学校毎に事実上異なっている。ある併用学校は、全校を通じて口話クラスを維持しているが、校庭や集会や売店では、手話と指文字を許容している。他の併用学校は、年長レベルでコミュニケーション法として、指文字を使うクラスがある。殆んどの学校では、学校以外の場所では、手話を許容するけれど、クラス内でのコミュニケーション法としては、手話言語を許さないと主張している。(中略) 少数の寄宿制聾学校と殆んどすべての通学制聾学校は、『純口話』学校として知られている。」

この記述から、次の点が明らかである。

- (1) ある併用学校は、クラス内の学習活動では指文字、手話の使用を許さないが、集会などではその使用を認めている。
- (2) また、ある併用学校は、年長レベルにおいて、口話に指文字を併用するクラスを設けている。
- (3) 殆んどの学校は、手話を学校以外の場所では許容するけれども、クラス内でのコミュニケーション法としては許さない。
- (4) 少数の寄宿制学校と、殆んどすべての通学制学校は「純口話」学校である。

寄宿制学校における、年長レベルでの指文字併用のクラスは、一般に「手指クラス」と言われている。こうした、口話クラスと手指クラス(併用法によるクラス)を、同一学校に併存させる方式を「併用方式」(Combined System)と言って、方法上の「併用法」と区別している。この点に関して、パークレーのカリフォルニア聾学校長Stevenson, E. A. は、次のように指摘している(Garretson, M. D. 1947)。⁶⁾

「併用方式(combined system)は、あるクラスは手指で教えられ、あるクラスは、口話で教えられるという配備を意味する。手指クラスは、手指アルファベット、または、指文字を手段に教えられる。手話は方法ではない。それ故、クラス内では使わない。しかし、それらはコミュニケーション手段として、外部の諸活動において生徒によって使われる。」

このように手指使用と言っても、指文字と手話では、その扱いが相違している。「手指クラス」

「併用方式」というとき、クラス内の学習活動では、指文字が使用され、手話はクラス外の集会などで認められているにすぎないことに注目しなければならない。Stevenson が、手話は生徒同士のコミュニケーション手段ではあっても、「方法ではない」と述べている点は、興味深い。すなわち、手話は「教育の方法」としては位置づけられていない点に、1940年代当時の手話の教育的地位をうかがい知ることができる。

3 「手指クラス」の意義

「手指」(manual) という用語は、聾教育の専門家や外部の人々によって誤解されていると、Stevenson は指摘している。すなわち、彼は、手指ということばは、「教育的に」失敗したために、今や「手仕事」(織物作業、手工業など)を受けているという、一般的解釈や印象をもたらすので、この用語を廃止した方がよいと強調する。そして、手指クラスは、遅滞児たちの「特別クラス」(それは、口話あるいは、手指のどちらで教えられていても)とは違うものであり、併用方式に従う学校では、分類は、口話クラス、手指クラス、特別クラスから成ると説明する。⁶⁾

さらに Stevenson (1941) は、第32回聾教育者会議の会長挨拶の中で、同じく手指クラスを説明して、次のように述べている。¹⁵⁾

「スピーチと読話は、学校の主要な目標の一つであるが、知的に優れた子は、読話とスピーチが不能であることを理由として、能力が劣っていると考えることはできないであろう。手指クラスは、真に手指クラスとして明らかに存在するのであって『特殊』としてではない。言語成績と一般的学業での平均未満を考慮して、一般に特別学級として知られているクラスに入るべき者は、別に存在するだろう。」

このように、手指クラスは、特別クラスとは別の存在であり、手指クラスの子たちが、学習上の遅滞児を意味しないことを強調している。さらに Stevenson は、「手指」という用語に代えて「非口話」(non-oral) という用語を用いた方がよいと、次のように述べている(第33回アメリカ聾教育者会議, 1947)。「手指ということばは、曖昧であるので、カリフォルニアでは、非口話という用語を使うように努めている。この非口話クラスと知的劣弱性を絶対に結びつけるべきではない。」

更に、非口話(手指)クラスの存在意義について、「過去、現在において、読みと言語を犠牲にして、スピーチにあまり多くの時間を捧げているのは危険である。あまりに遅くなり過ぎる前にスピーチでの不成功を直ちに認めるようにすべきである。非口話聾児が、手指または非口話クラスにおけると同様に、口話クラスで良好な教育的進歩を達成しようという、いとも簡単に作られた説明は事実ではないし、根拠がない。」と主張している。¹⁶⁾

同じく、Greenum, R. M. は「誤った基準」という論説で、手指クラスについて、誤解があるとして、次のように強調している(Garretson, 1947)。⁷⁾

「聾教育の成功にとって、最大の障害の一つは、スピーチと読話という本当に困難な技術をマスターできない聾児たちは、平均未満の知能であると書く『エキスパート』がいることである。1946年9月の American Annals of the Deaf の論文で、ある筆者は、ある聾学校が、手指、口話、聴覚教育の各部にグループ分けられていることに関連して、次のように記述している。——『グループ I、学習能力が多分、正常より劣るために、読話、口話、スピーチに困難をもつ特別な子たちのための手指言語』——。(中略) 読話の下手な者は、知能正常未満であるという仮設は、極端に危険なものである。それらの子を、知能正常未満の特別学級、特殊学校へ追いやる実践は、さらに危険なことである。」

さらに、Greenum は、クラス内でのコミュニケーションが十分に成立するには、その方法を子どもが完全に習得していなくてはならない。話されたことの理解に、すべての努力を注がなければならないとすると、教科学習(学力)の進歩は著しく遅れるだろうと、暗に口話法を批判している。

以上の Stevenson と Greenum が指摘していることは、次のように要約できるであろう。

(1) 一般的に誤解があるが、口話と指文字を併用する手指クラスは、言語力や学力の上で遅れた子たちのための特別クラスとは違うものである。

(2) 口話の能力を身につけられない者は、知能平均未満であるとする見方は間違っている。知能が平均以上でも手指を用いている者がおり、手指使用と知能劣弱性を結びつけるべきではない。

(3) 口話での不成功が確認されたら、口話に固

執すべきではなく、直ちに手指を活用すべきである。

とくに、コミュニケーションの十分な成立が科学学習の基礎であるとする Greenum の指摘は重要である。

4 イリノイ州立聾学校の実践

(1) イリノイ校の手指部の実際

前述のように、州立寄宿制聾学校において、併用法の採用、あるいは、手指クラスが存在がみられるが、ここでは、大規模な州立寄宿校である、イリノイ州立聾学校の手指部（manual department）の概要をみている。

同校の1948-49年度における、学習上の部編制は全校が3つの部から成っている（イリノイ・プラン）。それは、口話部と聴覚部（acoustic）と手指部である。その対象学年と人数は、表2の如くである。各部は、独自の建物、教師、寮母を有している。とくに、手指部がユニークな存在である。手指部といっても、口話と手指の併用であって手指のみを用いるものではない。

Table 2 イリノイ校の部編制

	ユニット	対象学年	人数	%
口話部	I	幼小レベル	98人	24.2
	IV	2学年～9学年	61人	15.1
聴覚部	II	幼小レベル～9学年	164人	40.5
手指部	III	幼小レベル～9学年	82人	20.2
合計			405人	100

（注）聴覚部は補聴器使用

このような部編制は、1935～40年の間に開始されたが、手指部1940年の秋に新しく編制された。すべての聾教師は、この部に属している。最初は、すべての子が言語使用テストによって、口話部（Iユニット）か、聴覚部（IIユニット）に入学し、口話で満足のいく進歩がみられないことがわかると、手指部へ移される。教師、主事、心理士によって会議がもたれ、移行の理由と助言が与えられる。⁴⁾

なぜ手指部を設けたかという理由について、同校の主任教師、Orman, J. N. は次のように説明している。¹⁴⁾それは、教育理念として個人差の

問題を考慮しているからである。子どもたちの中には、読話、発語を学べない者がいる。その子らは、知的遅滞児と、知能は平均以上だが、口話、聴覚法に適さない児童の二つのタイプに分けられる。この部の子たちは、指文字、手話言語を通じて書記言語を学習することができる。

このイリノイ聾学校での手指部の存在の重要な教育的意義について、同じく、Orman は次の点を挙げている。¹³⁾

(1) この部の児童たちは、スピーチ、読話という困難性をもつ必要はない。彼らは、全く違った条件の下で新しいチャンスが与えられている。

(2) 彼らの問題について、本能的な（より適切なことばが思い浮かばないが）洞察力を有する聾教師によって教えられる。

(3) 正常性（normality）への道が鎖されないかという疑問については、この子らの正常性への唯一の道は、読み書きを意味する言語発達の道である。言語は、読み、書き、指文字、さらに、手指英語（Manual English）と称される形式での手話言語の適切な使用によって教えられる。こうした成果として、とくに、初等クラスにおいて、言語発達や算数に明確な進歩を示した。この点は、スタンフォード・アチーブメント検査で証明されている。

(4) この部門が組織されたとき、我がイリノイ聾学校は、このタイプの仕事について訓練を受けた教師の欠如によって、重大なハンディキャップをもっていたが、この条件は、大きく改善された。とくに、児童に対する指文字の理解についての訓練が重視された。

今みてきたように、イリノイ聾学校は1940年の秋より手指部を設けて、約20%の在学児に手指を使用して教育している。すべての児童は、最初口話部か聴覚部に入学し、口話で満足のいく進歩がみられないことがわかると手指部へ移される。この部の子たちは、彼らに適応した条件の下で、新しいチャンスが与えられる。口話に加えて指文字、手話を使用して、読み・書き能力の向上がねらわれた。その成果は、アチーブメント検査でも証明されている。とくに、指文字に力点があるとはいえ、手話が、「手指英語」という方式で導入、使用されている点は、注目すべきである。

(2) イリノイ校でのコミュニケーション方法の比較研究

イリノイ州立聾学校での手指部の概要は、前記の通りであるが、ここで取り上げる Johnson の同校の各部におけるコミュニケーション方法の比較研究は、後の Hester, M. S. 校長指導によるニューメキシコ聾学校の早期よりの指文字導入の一要因となったものとして重要である。

対象は、同校の253人（第4学年～第9学年、11～24歳）である。内訳は、口話部77人、聴覚部96人、手指部80人である。シカゴ非言語性知能検査（188人に実施）の平均 I. Q. は、それぞれの部で、99、97、95であった。

第1の実験は、口話部、聴覚部、手指部の各部の通常の学級で使用している、コミュニケーション・メディアを用いて、言語理解力を測定している。すなわち、口話部は読話、聴覚部は聴能と読話、手指部は手話と指文字のそれぞれのメディアで、10の文（例、The rabbits ate carrots and lettuce.）が提示され、書き取りによって理解力が測定された。読みの能力は、Gates I 検査型式が実施された。

Table 3 Gates 検査とクラスのコミュニケーション・テストの成績
手指部、口話部、聴覚部の児童

学年レベル	Gates 検査 I 形式			クラスのコミュニケーション法		
	手指	口話	聴覚	手指	口話	聴覚
	学年			%		
4	3.5	3.1	5.0	38	19	83
5	3.3	3.5	5.3	53	22	85
6	4.3	6.1	5.1	66	38	84
7	4.3	5.6	7.3	65	48	92
8	5.4	5.3	6.7	72	24	78
9	5.2	5.9	9.2	71	58	90
平均	4.1	4.4	6.5	59	30	85
SD	1.1	1.5	2.5	16.6	21.1	19.1

結果は、表3の如くであった。このことから、コミュニケーション法についてみれば、聴覚による理解力が最も優れ、手指、口話の順であった（それぞれの間で有意差あり）。口話部の低得点はいろいろな理由が考えられたが、いずれにしても、これらの子にとって、読話は非常に簡単な言語に對してさえ、たいへん貧弱なコミュニケーション手段であることを意味していると結論づけられた。手指部は、学年が進むにつれて、成績がしだいに向上している点が特徴的であった。なお、手指部にいる、両親聾の聾児がただ一人、読みの能力で学年相当を上回る成績をおさめた。

第2実験では、各部に対して、次の各コミュニ

ケーション法で提示した文の理解力を調べた。

- ① 聴覚を通してスピーチを理解（10文）
- ② 読話を通して理解（10文）
- ③ 聴覚に加えて読話による理解（10文）
- ④ 指文字を通して理解（10文）
- ⑤ 手話と指文字を通して理解（10文）

結果は、聴覚部がどのコミュニケーション法でも優れた成績をおさめた。とくに、① 聴覚のみ ② 読話 ③ 聴覚と読話において、その差が著しい。④ 指文字および⑤ 手話と指文字においても、聴覚部は他の二つの部に同等以上の成績をおさめたことは、予想に反することであった。その解釈として、聴覚部の児童は、聴覚を通して正常な言語パターンを獲得しているために、手話言語による表現のギャップを埋めることが可能であるためと考えられた（表4参照）

Table 4 各コミュニケーション法による手指、口話、聴覚の各部の成績
（平均正答率）

	手指	口話	聴覚
① 聴覚のみ	0%	1	63
② 読話	9	33	66
③ 聴覚と読話	10	38	92
④ 指文字	76	75	73
⑤ 指文字と手話	59	60	62

聴能訓練に関係して、次の点が強調されている。聴覚の鋭敏さよりも、聴能訓練による聴覚経験の豊かさが高得点（読み、コミュニケーション能力、学業）に関係がある。したがって、聴能訓練により、アチーブメントの向上を考える必要がある。

手指コミュニケーションに関する結論として、きわめて重要な指摘がなされている。指文字のみに比べて指文字に手話言語を加えた時の成績が、低いことから、この対象児にとって、指文字と手話の併用はむしろ、不十分なコミュニケーション方法である。したがって、すくなくも、手指部の成績が指文字のみの方が、指文字と手話の併用よりも優れている結果から、クラスのコミュニケーション法を、両者の併用から指文字のみに変更することにより、アチーブメントが向上することが示唆された。⁸⁾

この結論は、いわゆるロチェスター法を支持するものである。このことを一つの根拠として、

Hester は、ニューメキシコ聾学校の幼稚部に指文字を導入したことは、前述のとおりである。これに比べて、この研究結果は、手話言語に対する評価があまり高くないことを表わしていると言える。

5 ミシガン州立聾学校の手指利用の状況

ミシガン聾学校の校長、Wooden, H. Z. は、同校の指文字、手話の利用について次のように説明している (Ulmer, T. A. 1945)。¹⁷⁾

聾児にとって、読唇によって言語を学ぶことは、話しことばを聞いてそれを学ぶよりも、さらに困難である。言語を学ぶ、他の二つの方法は、①話題となっている事象に連合して、指文字表現された言語を目でとらえる、② 同じ条件で書かれた、または、印刷された説明文を読むことによるものである。

上級学年 (advanced grade) に達するまで、あるいは、英語を流暢に使える能力を獲得するまでは、上記のようなやり方が行われる。その後、彼らは社会生活に備えて、適切な手話の使用が教えられべきである。結果的に、ミシガン聾学校は、教育の向上の基礎として、英語の完全な体系的指導に力点を置く。その後で、集会や公共の演説に便利な、すばやい手段として、手話の適切な使い方を希望者に教える。そうすることによって、少年少女の当然の権利である、幸福な有益な生活を享受するための最善な準備がなされることになる。

この説明からわかる通り、同校は英語の体系的指導に重点を置き、口話法を基盤に指文字の使用を配慮している。手話は、上級学年に至って社会生活に備えて、希望する者に教えるというようにその意義は認めつつも、指導法上はあまり力点を置いていない。英語の体系的指導を強調する場合、指文字は手話に比べて、より有効であると考えられているからであろう。このことは、手話は、英語を流暢に使える能力を獲得したあとで、教えるという事実からも推察できる。

6 ロチェスター聾学校の状況

ロチェスター聾学校は、1876年の学校創設直後より、口話に指文字を併用した、いわゆる「ロチェスター法」で教育を開始している。当初、幼児のレベルより、指文字を導入したが、20世紀に

入ってからは、次第に高学年まで指文字の使用を控えるようになってきた。さて、1940年代において、同校はいかなる実態で、教育を行っていたのかを次にみてみる。

校長の Galloway, J. H. は、1947年の第33回アメリカ聾教育者会議において、次のような報告を行っている。⁵⁾

ロチェスター校では、英語が聾児の母国語になりうると確信している。これを達成することが、ロチェスター法の主要な指導目標である。ロチェスター法では、指文字が広く使われる。なぜならば、慣用句に豊む英語で、意志を流暢に正確に交換するのに、指文字は理想に近い手段を提供できるからである。

ロチェスター校では、すべての子は、最初の7年間は、もっぱら口話法で指導される。学校生活の中で、教室の内外で、子どもは能力の限り、口話で自己表現をすることを要求される。

指文字は、教科の教材が重大な関心事となる、およそ第4学年で学級内で初めて採用される。スピーチと指文字は結合して、いつも使われる。手は、唇と同じ水平線上で、顔の側面より約12インチのところで保持するように配慮される。すなわち、読話を補助するためである。それは、補聴器が読話を補助するのと、まさに同じである。

指文字の使用の程度は、子どもたちのニーズによるが、一般に中学部、高等部に進むにつれて、ますます使われるようになる。指文字は言語の獲得に対して、子どもを動機づける働きをする。

以上の Galloway の報告から、ロチェスター校における、コミュニケーション方法上の指文字の地位について知ることができる。ロチェスター法は、聾児における英語の確立を主要な目標としている。入学後7年間は、口話法を基盤として、口話での自己表現を要求している。その後、教科指導が重要な段階に入ってくる第4学年より指文字が導入され、中学部、高等部でさらにウエイトを増してくる。指文字は、読話の補助として位置づけられているが、指文字によってコミュニケーションが正確、流暢に行なわれ、子どもの言語獲得が動機づけられると考えられている。ここで重要な点は、指文字が口話の補助と考えられていることであり、手話については全く考慮されていないことである。このロチェスター校の方法は、1950年代に入ってから、カリフォルニア・リパー

サイド聾学校が、中学部の全生徒を対象に導入、採用していくことになる。

結 語

本稿は、1940年代における手指使用の教育状況を明らかにすることを意図した。その結果、次の点が明らかにされた。

(1) 寄宿制聾学校に関する、二つの調査結果から、大多数の寄宿制聾学校は、何らかの形で指言語を使用していることが明らかとなっている。とくに、中等部、高等部で手指クラスが設けられ、口話と手指が併用されているところが多い。

(2) この寄宿校での併用の状況は、学校毎に異なるが、手指クラス内では指文字の使用を認めることはあっても、手話の使用は許されていない。また、校庭や集会などでは、指文字、手話を許す学校もある。寄宿校においてさえ、手話は「教育の方法」としては位置づけられていなかった。

(3) 「手指クラス」は、口話と指文字を併用して教育をするクラスで、学習遅滞児に対する「特別クラス」とは違う。手指クラスの生徒が手指で教えられていることから、知能、能力が劣っていると考えるはいけなない。

(4) 口話での学習の不成功が確認されたら、直ちに手指を活用すべきである。口話での理解に努力を注ぐよりも、教科内容を理解するには手指の併用が必要であるという主張がみられる。コミュニケーションの成立が教科学習の基礎である。

(5) イリノイ州立聾学校において、1940年の秋から手指部が置かれている。当初、すべての子は口話部、聴覚部で教育され、満足のいく進歩がみられない場合に手指部へ移される。これは子どもの個人差を考慮した処置であり、手指部において新しいチャンスが与えられるのである。同校では指文字に力点があるとはいえ、手話が、手指英語という方式で導入、使用されている点は、注目すべきである。

(6) 同校でのコミュニケーション方法の比較研究では、口話と指文字の併用の有効性が示唆されたが、このことは、後のニューメキシコ聾学校の聾幼児への指文字導入に影響を及ぼすことになった。

(7) ミシガン聾学校では、英語の体系的指導に重点を置き、口話法を基礎に指文字の使用を配慮している。手話は、上級学年において社会生活に

備えて、希望者に教えられているにすぎない。

(8) ロチェスター聾学校では、すべての子は最初の7年間は口話法で指導され、教科の内容が重要となってくる、およそ4学年で指文字が学級の中に導入される。指文字は読話の補助と考えられている点特徴的である。

以上のことから、1940年代において、寄宿制聾学校において、手指使用の教育状況が存在していることが確認された。また、手指使用の特徴点が明らかにされた。次の作業として、同じく、1940年代における、手指の有効性に関する主張を検討、考察したいと考えている。

文 献

- 1) Brill, R.G. (1948): The Special Education of the Deaf. Silent Worker, Sept., 13.
- 2) Brown, R.C. (1945): A Survey of Instructional Programs in Primary Grades in Forty-Nine Public Residential Schools for the Deaf. The Faculty of Hampton Institute, 1-46.
- 3) Caswell, R.R. (1946): A Review of the Little Paper Family for 1945-1946 II. Amer. Ann. Deaf, 91 (5), 421.
- 4) Cloud, D.T. (1940): The Illinois Preschool Experiment and Present Plan. Amer. Ann. Deaf, 85 (3), 237.
- 5) Galloway, J.H. (1947): Speech and Rochester Method. Report of 33 Meeting of Amer. Instructors of the Deaf. 63-65.
- 6) Garretson, M.D. (1947): A Review of the Little Paper Family for 1946-47 I. Amer. Ann. Deaf. 92 (2), 295-296.
- 7) Garretson, M.D. (1947): Ibid., 92 (5), 454-455.
- 8) Johnson, E.H. (1948): The Ability of Pupils in a School for the Deaf to Understand Various Methods of Communication -II. Amer. Ann. Deaf, 93 (3), 258-314.
- 9) 草薙進郎 (1981) : 「アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開 (3)」心身障害学研究, 5(1), 37-41.
- 10) 草薙進郎 (1982) : 「アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開 (4)」心身障害学研究, 6(1), 1-9.

- 11) 草薙進郎 (1983) : 「アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開 (5)」心身障害学研究, 7(1), 1-10.
- 12) 草薙進郎 (1983) : 「アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開」特殊教育学研究, 20(4), 9-17.
- 13) Orman, J.N. (1949): The Manual Department of the Illinois School. Report of 34 Meeting of Amer. Instructors of the Deaf. 63-68.
- 14) Orman, J.N. (1949): The Manual Department of the Illinois School Silent Worker, Dec. 11-12.
- 15) Stevenson, E.A. (1941): The School of Tomorrow. Report of 32 Meeting of Amer. Instructors of the Deaf. 83.
- 16) The 33 Meeting of Amer. Instructors of the Deaf. 1948, Amer. Ann. Deaf, 93 (3), 238-239.
- 17) Ulmer, T.A. (1945): A Review of the Little Paper Family for 1944-1945. Amer. Ann. Deaf, 90 (4), 304.

Summary

Development of Total Communication in the Education of the Deaf in U.S.A. (7)

— Position of Manual Method of Communication in 1940's —

Shinro Kusanagi

Total communication arised at the end of 1960's and developed rapidly for 1970's in the education of the deaf in U.S.A.. Recently the author analyzed the issues of "Evaluation of Manual Method in 1950's", "Position of Manual Method of Communication and its Methodology in 1960's", and "Evaluation of Oral Method and Advocacy of Manual Method of Communication in 1960's".

The purpose of this paper is to clarify the issues of position of manual method of communication in 1940's in the education of the deaf.

The results studied are as follows:

1. The most residential schools for the deaf used manual method of communication in instruction of the deaf in some ways.
2. The position of manual method (manual language) was different in every residential school. Finger spelling was used in "manual class", but sign language was not permitted in its class.
3. Manual class was different from "special class" for the retarded in learning. Absolutely no thought of mental inferiority should be held with using manual language.
4. Illinois School for the Deaf organized Manual Department in 1940 basing on the fact of individual differences of the deaf. Experiment on various method of communication in this school suggested the usefulness of finger spelling in instruction of the deaf.
5. In Michigan School for the Deaf finger spelling was used in association with oral communication. In the advanced grades for the sake of students' social life they were taught the proper use of signs.
6. In Rochester School finger spelling was first used in the classroom at about fourth grade level, where subject-matter material became a serious concern.

The next study is to make clear the advocacy of manual approach in the education of the deaf in 1940's.

Key word: total communication , manual method , manual class , finger spelling , sign